沈黙の荒野

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙の荒野

【Nコード】

N0473J

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

梅雨空の中、新宿で通り魔事件が起きた。

犯人はすぐに取り押さえられたが何も喋らず、所持品は女性の戒名の付いた位牌と五万円の現金だけ。

警察は戒名から身元を割り出し、出所を掴む事が出来た。

その位牌は、新潟のある寺からのもので、交通事故で即死したある女性のものであった……。

六月中旬。毎年この頃はジメジメしており、気持までも憂鬱で今一つスカツとしない季節である。それに今年は十何年かぶりという六月の台風がやって来るといふ。

午前七時、大型台風六号は紀伊半島に上陸、進路を北東にとつていた。

その頃、東京では湿気を帯びた熱い風が、ときおり凄まじい勢いで吹いていた。雨も横風の中を飛んで行くように降っている。道行く人は傘をおちよぼにしながら、急ぎ足でビルの中へと入って行く。

今日は日曜日なので人の出はかなり少ない。まして大型台風が近づいているので、ここ新宿駅は閑散としていた。JR、私鉄、地下鉄と、ビッグターミナルのホームは、一年の中でも滅多にないほど人の数が減っていた。ホームの端から端まで、数えることができるほどである。

そんな中、新宿駅で通り魔事件が起きた。その男はすぐに乗客と乗務員に取り押さえられ、警察に引き渡された。

「名前は？」

新宿北署で、若い刑事が強い口調で聞いた。

まだ興奮冷めやまぬ容疑者は、目をキョロキョロとし、落ち着かないでいる。

「名無しか？ お前の名前を聞いてるんだよ」

別の若い刑事が、その男を睨んで言った。

男の持っていたバッグの中には、現金五万円と小銭が少々、そして位牌が入っていた。身元の分かるようなものは何もなく、身なりは薄汚れたブレザーとヨレヨレのズボンのいでたちであった。

「黙ってちゃ分からないんだよ」

若い刑事がその男の襟を掴んだ。

「いずれ分かることなんだから、手間をとらすなよ」
襟を持った手に力を入れた。

男は首を曲げて、口をへの字に結んだ。

「そんなに言いたくないのならそれでもいいが……」

刑事は襟から手を離れた。そして位牌を持ち、男の前にかざした。

「この位牌は？」

戒名に姉という字が刻んである。

「お前の女房か？ それとも妹か？ 母親か？」

刑事が続けざまに質問したが、男は顔色も変えず口を噤んだままである。

「まったく。呆れた野郎だな」

警察は通り魔事件として、現在容疑者を取り調べ中であると発表した。

事件の概要は、新宿駅JR埼京線の到着電車から、ホームに降りて来た乗客三人を刃渡り二十センチの包丁を振り回し怪我を負わせたのである。三人共胸を切りつけられ、近くの病院で手当を受けた。幸い二人はキズが浅く入院するほどではなかったが、一人の男性はキズが深く容態はあまりよくない。

警察は、この三人と容疑者との関係を調べたが、容疑者の身元が分からないので捜査は難航している。

すでに事件から五日が経ったが、容疑者はまだ黙秘を続けており、捜査は新宿北署から警視庁に移管された。

入院している男性の容態は依然良くなり、家族は病院に付きつきりである。

「見ず知らずの人からある日突然刃物で切られたのだから、本人が一番くやしいだろうな」

「当然ですよ。全く頭に来ますよ」

警視庁の大野刑事は、カッカしていた。

「所持品は位牌と五万円の現金だけ。体は中肉中背でこれといった特徴があるわけじゃなく、前科もない。全く……。私はだれでしようとかイズみたいなものだ」

松山警部は呆れていた。

そこへ、埼京線の一つ一つの駅を当たっていた木村刑事から連絡が来た。

「川越駅にいますのですが、写真の男というよりもその薄汚れたブレザーに見覚えがありません。その男は当日の六時頃にここで目撃されています」

「川越か」

松山は埼京線沿線の地図を広げた。

「そのまま埼京線に乗って新宿に来たわけだな」

「いや、違います。埼京線ではなくて、東武東上線のホームで目撃されています」

「うん？ なぜだ？」

「さあ、分かりません」

新宿へ行くのには、川越から埼京線でそのまま行ける。時間は快速で五十一分。東武東上線だと池袋まで行き、そこから乗り換えて新宿まで三十八分。たとえば七時に新宿へ行くとしたら、どちらの電車に乗ってもいいわけである。

松山は考えた。

時間の余裕があつて新宿へ行くのなら、一本で行ける埼京線に乗るのが当たり前である。わざわざ池袋で乗り換えて行く東上線に乗る必要はないのである。それとも時間は別に関係なく、たまたま七時に新宿に着いたただけなのかも知れない。それなら東上線で行つても別に不自然はない。それは、普段乗り慣れているからかも知れない。

「警部」

大野が、地図に指をさして言った。

「奴は、別に新宿じゃなくても良かったのかも知れませんか」

「なぜだ？」

「池袋でも新宿でも、人が大勢いればどこでも良かったんじゃないですかね。あの日は日曜日で、しかも台風が来るといっているのでどこも空いていました。池袋ほどの駅でも滅多にないくらい空いていたと聞いています。それで奴は新宿まで行ったのと違いますかね」

大野が池袋から新宿まで指をなぞった。

「そして、奴は新宿で獲物を狙いながら物色した。しかし、新宿も閑散としておりしかたなしに埼京線のホームをブラブラしていたところ、電車からワツと人が降りて来た。そこで咄嗟に切りつけてしまった」

大野が一気に喋った。

「いい線だな」

松山が感心した。

そこへ、石橋刑事から連絡が入った。

それによると、位牌は確かに女性ののものであって、宗派は真日宗のものであることが分かった。

さっそく真日宗のお寺に確認を入れた。まず都内、そして川越及びその周辺。

しかし、該当するお寺はなかった。

「違う所ですかね」

大野が松山に聞いた。

「都内はないとしても川越の周辺にはあると思ったが、その先かも知れんな」

戒名の名付け寺が分かれば、当然、位牌はだれのものか分かるわけである。

2

その後、入院していた重体の男性が亡くなった。家族の怒りを、松山が容疑者にぶつけた。

「お前の刺した一人が亡くなった。これでお前の容疑は殺人未遂ではなく殺人容疑ということになった。いつまでもしらを切っている」と仏が成仏できんぞ」

「黙ってても、お前が刺して人を殺したことは変わらないんだよ！どこのだれだか分からなくても捌きはできるんだ。いい加減に吐いたらどうなんだ」

松山と大野は、苛立っていた。

「家族のことを心配してるのか？」

松山が、容疑者の顔を覗き込んだ。

「お前がいないのでそっちの方を家族は心配しているぞ。そろそろ捜索願が出るんじゃないかな。そうすれば、すぐにお前の身元は割れるんだ。遅かれ早かれ時間の問題なんだから、いい加減に吐いたらどうなんだ」

松山は、喋っている内段々と興奮して来て、机をドンと叩いた。

「無差別の殺人容疑なんだ、黙ってて済む問題じゃないんだぞ」

大野も、いい加減うんざりしていた。

最近だけではなく、一年前まで溯って捜索願の綴りを調べたが、該当する人物は浮かび上がって来ない。範囲も広げてみたが容疑者Aの身元は依然謎のままである。

「お前の名前は容疑者Aと言う名無しの殺人犯だ。いつまでもお前と付き合っではいられないんだ。俺は殺人犯を捕まえるために忙しくて、捕まえた殺人犯の名前を聞くためにこうやっている時間なんかないんだよ。ただ、何も知らない人が見ず知らずの人に刺されて殺されたわけだから、せめてその理由ぐらいは殺された家族に知らせてやるのが当然だろう。だから毎日こうやってお前の顔を見ながら聞いてるんだよ」

松山は、喋りながらその男の顔を何度も覗き込んだ。

「しかし、それも今日で終わりだ。さっきも言ったようにそんなに暇な人間じゃないんだ。ちょっと息抜きにお前と付き合っただけなんだ。強情なお前の顔はずっと覚えておくよ。じゃあな」

容疑者Aは顔色一つ変えず、松山の顔を見た。そんな容疑者Aの顔を見据えて、松山は取調室を出た。

松山班は、今回のこの通り魔事件と二ヶ月前に上野駅で起きた通り魔事件との繋がり調べるため、この容疑者Aの調査に当たったのである。

上野の通り魔事件は、常盤線の電車から降りて来た乗客に、無差別に包丁を振り回して五人にケガを負わしたものであった。事件は今回のものと丸つきり同じだが、人混みに紛れて逃げた犯人は年齢好二十歳ぐらいの若い男だと、目撃者の一致した言葉だった。

その犯人を追っているところに、新宿で同じような通り魔事件が起きたので、松山班は一時、この容疑者に着いてみたのである。

上野と新宿とまったく同じ点は、電車から降りて来たところを無差別に切りつけた事と、犯行時間が同じ午前七時という点であった。松山は、二ヶ月も経つのに未だ容疑者らしい陰も出て来なくて焦っていたところに、この新宿での事件が起きたのである。

上野と新宿での容疑者Aとの接点は何もなく、松山班はまた元の上野駅通り魔事件の捜査に戻った。

上野での被害者も一人が命を落としている。その亡くなった人とケガをした人、そして、今回の新宿での被害者全員の接点も今のところ何も出て来てはいない。

この二つの事件は、単なる別々の通り魔事件として扱われることになった。

「何かが掴めると思ったのだが・・・」

松山は、木村、大野、石橋の三人の刑事を前にして、だれにともなく言った。

「でも、あの男は変です。今回の通り魔事件の他にも何かやっっているような気がします」

大野が、自分の感じたことを喋った。

「上野の通り魔事件とは何の関係もないかも知れませんが、あの男はきつと何かをやらかしていると思います。体全体からそんな危険

な匂いが発しているように感じました」

「君もそうか。実は私も何かを感じた。刑事のカンとでも言うものかも知れん」

松山は、容疑者Aを取り調べ中、こいつはもつと何かをやっているなと感じていた。それを大野刑事も感じていたと言い、容疑者Aを再度調べてみる必要があると思った。

管轄外の捜査であるが、石橋刑事が引き続き専従として新宿北署に加わり、容疑者Aの捜査に当たることになった。そして、位牌からの割り出しを引き続き担当することになった。

3

石橋刑事と新宿北署の甘野刑事は、位牌に書かれた戒名の出所を埼玉の川越から更に北へ北へと捜査を広げ、ようやく出所が分かった。それはなんと、新潟の寺泊まで追って分かったことであった。その真日宗の僧侶が言うには、一年前に寺泊町に住んでいた門馬一昭の妻、明子のものであることが分かった。

明子は、去年の六月十八日の午後十時頃、夫一昭の運転する乗用車に乗り、降りしきる雨の中、スピードの出し過ぎで運転操作を誤り、電柱に激突し明子は即死、一昭は二ヶ月の重傷を負った。

門馬夫婦には子供がなく、一昭は退院後、家売り払い寺泊町を出て行った。その後、一昭を寺泊町で見た者はいないということだった。

そこで、一つの疑惑が持ち上がった。

それは、一昭が事故の一ヶ月前に妻の明子に多額の保険を掛けていたことが判明し、一時は保険金殺人ではと警察は疑ったが、事故の状況判断からそれは取り消された。

「なるほど、それは面白いな。これで容疑者Aは門馬一昭であることにはば間違いないな」

「門馬一昭の家は、去年の八月二十九日付で第三者に登記されてい

ます。住民票の方は、寺泊に置いたままですが……」

「足取りは、分からないのだな」

「ええ、住民票はそのままですし、荷物は置いたまま売却していません。何でも購入した不動産会社が家を壊して新築を建てるので、必要ないのならそのまま一緒に壊すからと言っことで、ポストンバッグ一つで寺泊を出て行ったそうです」

「バッグ一つでか……。保険金と家を買った金を持ってか……」

松山は、思索した。

（まさか、多額の現金をバッグに入れてはないだろう）

「寺泊にある金融機関を全部当たって、門馬一昭の口座を調べてみてください。もし口座があればその保険が下りた日以後、何日目かに五千万の金をどこかに入れているはずだ。それを調べれば分かると思う」

松山は、一昭の足取りを取るために、口座の金をどこの支店に出したか調べるよう石橋に指図した。

一方、甘野刑事から報告を受けた新宿北署は、容疑者Aを門馬一昭と断定し、背後関係を調べた。

門馬一昭の過去に、自分が運転する車で妻の明子を死なせてしまったという、暗い出来事があったのである。そして、多額の保険金を手にし、その一年後にヨレヨレの格好をして新宿駅で人殺しをした。

一昭の一年間の行動を追ってみれば、必ず何かが出て来るのではないかと松山は思った。

「北署で一昭の家を突き止めるだろう。保険金の五千万と家を買った二千万、これが今どうなっているかが分かれば、動機が見えて来るに違いない」

松山は、金だけではなく精神的に何かがあって、今回の犯行が生まれたのではないかと思った。

門馬一昭の住まいは埼玉県の川越市で、JR埼京線と東武東上線の交差する川越駅より歩いて五、六分のところにあるワンルームマンションの一室であった。

ワンルームマンションと言えば、主に学生が利用しているのだが、一昭は仕事の都合で単身赴任と偽り不動産屋を騙して住んでいたのである。

入居したのは去年の九月一日になっており、一昭は八月二十九日に寺泊の家を売却し、その足で埼玉に来て二十九、三十日をホテルなどで過ごし、三十一日に地元不動産屋を訪ね、ワンルームマンションの賃貸契約を結んでいた。

「寺泊の家を売ってその足で埼玉に来て、そのまま川越に住まいを決めたということは、根は元来まじめなんですね」

木村刑事が松山の話の聞き、転々とするいい加減な人間ではないと思った。

「ああ。寺泊での評判も悪くはなかった。奥さんとも仲が良かったと聞いているし、あの事故さえなかったら一昭は狂わなかったんじゃないかな」

「でも、一時は保険金目当ての殺人ではないかと疑われたんでしょ」

「まあな。でもそれはしかたがないんじゃないかな。亡くなる一ヶ月前に五千万もの保険を掛けたのだからな。自分の女房に五千万の保険を掛ける自体不自然だからな」

「そうですね、不自然ですよ」

大野刑事が口を出した。

「ところが、五千万もの保険を女房が受取人に自分にも掛けていたんだ。子供がなく、夫婦二人きりなのでどちらが先に行っても寂しい思いをしなければならぬので、お互いに保険を掛けて何かあった時はその金で第二の人生を生きようとしたわけだ」

「そうですね。美しい夫婦愛ですね。でも何か寂しいですけど

ね」

大野は、不安とも不審ともとれる顔で松山を見た。

「ということで、門馬一昭は悲劇のヒロインということなんだけど、何か引掛かっかけていてその悲劇のヒロインを肯定できないんだ」

松山の顔は曇っていた。

そこへ、石橋刑事から連絡が入った。七千万の金は川越の七つの銀行や信用金庫に一昭名義で、一千万円づつ預金がしてあるという報告であった。

松山の考える悪人説は少しづつ崩れて来ているが、必ず何かの犯罪を犯していると確信している。

5

石橋刑事は新宿北署での捜査を終え、本来の上野駅通り魔事件の捜査に戻った。

石橋は門馬一昭の足跡を追いながら、上野の通り魔事件の犯人との類似点を模索していた。目撃情報では、確かに二十歳くらいの人物ということで門馬一昭とは別人であると思うが、石橋の刑事カンから動機は似たようなものではないかと考えている。

一昭が善人であればあるほど、今回の事件は突発的なものとしかみられない。七千万もの現金を持ち、女房を死なせてしまった自分に精神的ストレスが襲い、錯乱状態に陥ったの犯行。

「甘野です」

新宿北署の甘野刑事から石橋に連絡が来た。

「門馬一昭は、川越の七つの金融機関の他にもう一つ、隣の町の信用金庫に貸金庫を借りていました」

石橋は、甘野の言うことを黙って聞いていた。

「その貸金庫の中に七千万円の通帳と、七人の名前を書いた手紙が出て来たのです」

「手紙？」

「そうなんです。その中に一人だけ変わった人物がいるのです」

甘野の言葉に、石橋は松山警部に替わった。

「その変わった人物とは？」

「あつ、警部。そちらで追っている上野の事件に何か繋がりがあ
るかも知れないと思ひまして」

「上野の事件と？」

「七人の中の一つに、台東区浅草という住所のものがありまして」

「浅草？ その手紙の内容はどんなやつだ？」

「それが、一千万円づつ七人に贈るといふ内容のものなんです」

「理由は？」

「何も書いていません。ただ、自分に何かあつた時この手紙が発見
されるだろうから、発見された時は七人に渡してほしいということ
しか書いてありません」

「なるほど。そのために七千万という金を手付かずに置いていたの
だな」

松山は唸った。

6

七人の人物名とは、妻明子が眠る寺泊のお寺、自分の姉と妹、
伯父と伯母、寺泊に住む内藤という人物、そして、浅草に住む大谷
一郎という人物であつた。

新宿北署は、浅草に住む大谷一郎以外の人物に確認を取つたが、
寺泊の内藤という人物だけは門馬一昭という名前に何の記憶もなく、
人違いじゃないかと突っぱねられた。そして、大谷一郎には、松山
警部自らが確認することにした。

東武線の浅草駅から歩いて5分足らずのところ、瀟洒な造り
のワンルームマンションがあつた。その二階に大谷一郎が住んで
いる。

松山は、玄関戸を開ける一郎の顔に犯罪者の陰を見た。

「大谷一郎さんですね」

犯罪者の名前を確認するような言い方で、松山が聞いた。

「はい」

一郎が一瞬怯んだ。

「門馬一昭という人物を知っていますか？」

松山は、単刀直入に聞いた。

「ええ」

その名前を聞いて、一郎は曇った顔をした。

「どういう間柄ですか？」

「僕の父親です」

「えっ！」

一郎のさらりと言う言葉に、松山は息を飲んだ。

「あなたは、今テレビなどで騒いでいる門馬一昭の息子だと言うのですね」

「ええ、そうです」

「なぜ面会に来ないのですか？」

「……」

一郎は下を向いて黙ってしまった。

「黙っていても分かりません。あなたの父親は殺人犯なのですよ。」

それに長い事身元が分からなくて、警察は大変だったのですよ。それなのにあなたは知らん顔ですか？」

松山は、一郎の態度を見て興奮して来た。

「でもおかしいな、門馬一昭には子供はいないはずだったが……」

「

「いや、僕は先妻の子なのです。母は僕を生んで三つの時に交通事故で死んでしまいました」

一郎は、松山の追求に少しづつ喋り出した。

「そして、父の姉夫婦に養子として引き取られたのです」

松山は、一郎の淡々と喋る言い方に、何か他人事のように聞こえた。

「それ以来、僕は父親とは一度も会っていないのです。名前もつい最近知ったばかりです」

「そうですか。実はあなたにお父さんからの手紙を発見しまして、一千万円のお金を渡してくれと言う内容のものなのです」

「一千万円ですか。笑わせませぬ」

一郎は、フフフと不気味に笑った。

「一千万円では少なすぎると？」

「いや、お金じゃないんです。僕は本当の父や母も知らずに育ったのです。たかが三つの時ですが、寂しい記憶は今でも覚えています。伯父と伯母は優しくかったのですが、子供心の複雑な気持は刑事さんには分からないでしょう」

一郎は、こぶしを作り力を入れた。

「親の、いやその育ててくれた伯父さんの家はどこですか？」

「そんなの関係ないでしょ」

一郎は、松山を睨んで強い口調で言った。

「いや、参考にですが」

「そんなことより、その一千万円を貰いに行けばいいんですよ。警察にですか？」

「そうですね、今はまだ確認をしている最中ですのでもうしばらく掛かります。あなたが門馬一昭の子供であるということを確認とらなければなりませんので」

「どうぞ。勝手にやって下さい」

松山は、一郎のマンションを出て新宿北署に向かった。

7

七人に対する手紙の主旨を門馬一昭に尋問しているが、あいかわらずの沈黙で北署の刑事たちは苛立っていた。

松山は、大谷一郎のことを細かく報告した。

「大谷一郎の過去に何か問題がありそうですね」

課長は、松山の報告に一郎の過去を調べてみる必要があると思つた。そして、部外者である内藤という人物、この内藤と一郎との間に何かの繋がりがあるのではないかと考えた。早速、寺泊町に飛んでいる捜査員に、内藤と一郎との繋がりがないか調べさせた。

松山班は、一郎の交友関係の捜査に当たることにした。

「歳格好がピッタリなんですよね。それに浅草住まい」

石橋刑事が、木村刑事に言った。

「仕事は今はやりのフリーターという事で、年中ブラブラしているし……、何とも分からんな」

木村も、一郎の複雑な過去を考え同情的にはなっているが、警部の言う犯罪者の臭いがするということを聞き、頭の中は混乱していた。一郎の素顔がどうなのか、松山が見たままがそうなのか、その下に違った顔があるのか。

「上野の事件と一郎との繋がり、門馬一昭と内藤という人との繋がり、また、新宿の事件と一郎との繋がり、そして、十七年前に交通事故で亡くなった一郎の母親と上野、新宿事件との繋がり、母親と内藤との繋がり。この中で何かが一致するものがあるかも知れん。門馬一昭は過去の出来事を一掃して、ここで終止符を打ったのかも知れんな」

松山は、この何組かの繋がりを黒板に書き、過去の出来事を頭の中で模索した。

「警部の言う、犯罪者的な臭いのする門馬一昭とその息子一郎。その二人の背負った過去の清算が、上野と新宿の二つの事件に答えがあると考えるわけですね」

木村が、松山の考えを解釈して言った。

「その内の一つでも何かの繋がりがあれば、糸はほぐれそうですね」
石橋も、上野事件の被害者の家族の顔を思い出して言った。

上野事件の被害者、沼田善二、五十二歳。住まいは千葉県松戸市。その松戸から常磐線に乗り上野で山の手線に乗り換えて池袋に行き、

そこから西武池袋線に乗って保谷駅で降り、そこにある小さな会社に勤める真面目なサラリーマンであった。

その沼田と一郎との関係。今までは、ただ被害者である沼田善二の方から一方的に調べていたわけだが、今度は一郎という人物との接点を調べるわけだから、何もないところから接点である人物を探すのではないだけに捜査の動向にも力が入って来た。

そして、新宿北署で扱っている門馬一昭と内藤という人物との接点、それに新宿で亡くなった被害者との接点、それらを取り巻く一郎との繋がり、北署でも捜査の動向に力が入って来た。

8

沼田善二。生まれも育ちも千葉県松戸市で、ごく一般的なサラリーマンの家庭に生まれている。過去に犯罪歴はなく、そのようなものに巻き込まれていることもなかった。親、兄弟、親戚にまで捜査を広げたが、これと言ったものは何もなく、一郎との繋がりも陰すら出なかった。また、一郎の交友関係から沼田善二との接点を探したが、これも繋がるものは何も出なかった。

沼田善二の二人の娘、高校生と大学生。一郎と何らかの男女関係があるかと慎重に捜査をした結果、こちらも一郎との接点は何も出て来なかった。

「沼田善二を調べれば調べるほど、単なる通り魔に襲われたとしか出て来ないな」

松山が、落胆した口調で言った。

「しかし、大谷一郎は単なる門馬一昭の息子ということだけでなく、私は何らかの犯罪を犯していると確信している」

松山はそう言って黒板を睨み、沼田善二と大谷一郎と書かれた上に×印をつけた。

「沼田善二の二人の娘と一郎とが、何か繋がりがあると思いましたがどね……」

木村刑事は、沼田の上の娘と一郎が同じ歳なので、何か繋がりがあ
るのではないかと期待して捜査をしたが、何も出なかったの
で、すっかりしていた。

そこへ、沼田善二と門馬一昭との接点を調べていた大野刑事から
連絡が入った。

「警部！」

大野が興奮して叫んだ。

「沼田と門馬との接点が見つかりました」
「なに！」

松山は受話器を持ったまま椅子から立ち上がった。

「単なる見物かも知れませんが、沼田善二の告別式の日、大勢の人
の中に門馬一昭の顔があったのです」

沼田善二の奥さんが、大野の持ち寄った門馬の顔写真に、ふと、
あることを思い出してくれたのである。

それは、夫善二の告別式の時、奥さんは霊柩車の中から頭を下
げている人たちをチラッと見たその時、一人だけ眼光鋭く霊柩車を見
ていた人物がいた。その人物の顔が大野の持って来た写真の男にそ
っくりなのである。

そこで、大野は当時の模様を取材したテレビ局に行き、その時
のビデオの中にはつきりと門馬一昭の顔を見たのである。

「そうか、よくやった」

早速、新宿北署に報告すると共に、再び合同で門馬一昭を尋問す
ることになった。

沼田善二とどのような繋がりがあ
るのかが分かれば、上野通り魔
事件の解決に一步進むのである。
ほんの僅かな接点であるが、そ
こに居たという事実はなんらか
の繋がりがあ
るわけだから、これが糸
口となり一つ一つ手繰り寄せる
ことができそうだと、松山は思
った。

明子の眠る墓前に、捜査員が花を供え線香を灯した。だれが供えたのか、既に一對の花が供えられていた。

新宿北署の甘野刑事は、内藤なる人物の調査を終え海に見える寺泊町の小高い丘の上にある、真日宗の寺に来ていた。

住職の記憶を探りながら、甘野は明子の過去を追った。

「去年は交通事故が多くて、他県から遊びに来た若者たちが解放感からか、スピードを出し過ぎて何人が亡くなった年でした」

実直そうな住職は、思い出すように語った。

「門馬明子さんは、ご主人の車に乗り電柱に激突して亡くなったのです。あの場所は見通しの良い直線が続き、ついスピードを出してしまうところなのです」

「そうですね。それに景色が良いので、ついわき見運転を誘われる危険な所ですね」

甘野は何度もそこを走って、景色の良さに驚いていた。

「ただ、あの事故の遭った時刻は午後十時頃で景色などにも見えず、わき見運転ではなくスピードの出し過ぎでハンドル操作を誤って電柱に激突したわけです。門馬明子さんは即死、運転していた門馬一昭は二ヶ月の重傷を負い病院に入院したわけです。明子さんには身内がなく、夫の一昭は入院しているので近所の人たちが葬式を出したと前に伺いましたが、なぜ一昭の身内の者は来なかったのですか？」

甘野は、ゆっくりとした口調で住職に聞いた。

「ええ。門馬さんの身内はだれも存じてなくて入院先に聞きに行っただのですが、その時は口が聞ける状態ではなかったのです。そして、近所の人たちが私のところに相談に来たものですから、そのように執り行ったのです」

住職は、記憶を手繰り寄せながら喋った。

「その時、世話を焼いてくれた近所の人たちを覚えていますか？」

「さあ……。ちょっと待って下さい」

住職が奥に消えた。

しばらくして、一冊の厚い本を持って来た。

「ここに書いてありました」

本の中ほどに、門馬明子と記されているところがあり、その次に世話人の代表と書かれ、三名署名してあった。

三名とも門馬一昭が住んでいた場所の近くである。

甘野は丁重に礼を言い、寺を出た。

10

三名の内一名はそこに住まいがなく、新潟市に転居していた。

現住所に居る二名は、前に一度聞き込みで伺ったことがある。

再度訪ねた甘野は、その世話人と記されていた事実を告げ、再び当時の様子を伺ったが目新しい事実はなく、最後の一人に会いに新潟市に向かった。

一方、大野は一昭の姉である大谷家に来ている。

一昭の口が聞いたのが明子の初七日で、ようやく姉の大谷恵子と夫である大谷恒蔵に連絡を取ることができたのである。

「その時の様子を詳しく話してくれませんか？」

大野は、大谷恵子にその時のことをしつこく聞いた。

「何度も言うように、あの時は気が動転していてよく覚えていないのです。まわりでは保険金殺人だとか言われまして、片身の狭い思いをしました」

大谷恵子は申し訳なさそうに言った。

「沼田という名前を聞いたことはありませんか？」

大野は、突然沼田の名前を出した。

「さあ……」

恵子は知らないと言った。

「内藤という名前も？」

答えは同じであった。

実の弟の一昭が、通り魔事件の犯人として捕まった事実を、当時

の片身の狭い思いより今回は数十倍にも堪えているのであろう。

大野は心境を察しした。

姉の恵子からは、何かを見い出すのは困難ではないかと大野は思った。また、新宿で亡くなった渡辺勇雄と、一昭、一郎、明子、沼田、それらだれとも繋がるものも出て来ない。

ただ、一昭が宛てた名前の中で内藤だけはフルネームではなく、姓だけというのが引つ掛かっている。ということは、それほど親しい間柄ではなく、苗字だけで名前は知らなかったのではないかと、松山は思った。寺泊の住所は一昭の思い過ごしか、何かの間違いでその住所を書いてしまったのかも知れない。

松山は、木村と大野を寺泊の内藤宅へ急行させた。

11

「ごめんください」

甘野は、井上という表札を確認してインターホンを押した。明子の葬儀の世話人である最後の一人の家である。

インターホンを押してからしばらく間があり、四十くらいの品の良い女性が玄関を開けた。

甘野は身分を証し、去年の出来事を話し、その当人であるかどうかを確かめた。

「ハツエは私の母です」

その女性は、世話人である井上ハツエの娘であった。

「井上ハツエさんは？」

「ちよつとお待ち下さい」

娘は奥の間に消え、しばらくしてハツエらしい人が出て来て、甘野を応接間に通した。「私が井上ハツエです」

どつしりと落ち着いた喋り方で、威圧感のある女性であった。

甘野は去年のことを話し、当時の様子や明子のことを伺った。

ハツエは、甘野の話聞きながら、気持ちを落ち着かさうと息を

大きく吐いたり吸ったりし、意を決したように体を前のめりにし、小さな声で語り出した。

「実は……、明子は私の娘なのです」

「えっ！」

甘野がびつくりした。

「明子が赤ん坊の時、私は離婚をし、明子を引き取ったのです。でも私は病弱で明子を育てて行く自信がなく、やむなく孤児院へ預けたのです」

ハツエは、当時のことを思い出しながら喋った。明子には、ハツエが母親であることを最後まで隠していたという。

「ところで、内藤という人をご存じないですか？」

甘野は、刑事特有の目でハツエを見た。

「内藤？」

ハツエは首を傾げ、

「知らないわ」

と言つて、思案する顔をした。

甘野は、もしかしたらと期待をしていたのだが、知らないと言われ少々がっかりした。でも、明子の肉親それも親が居たということが分かっただけでも収穫があった。そして、海に見える墓前に花を供えた人物は、ハツエと分かり甘野は納得した。

一方、木村と大野は寺泊に着き、内藤さんの住所とその名前を門馬一昭がどこでどう知ったかを調査した。

その住所地の内藤さんは、依然、門馬一昭の名前に記憶がなく、首を傾げるばかりであった。

「内藤さんはずーっとこの地に居るとおっしゃいましたよね」

木村が、六十過ぎのあるじに聞いた。

「ええ、私の親の代からここに居ます」

木村は、自分の推理の中で引掛かっていたことを聞いた。

「その時、親御さんはここで何かをしていませんか？」

「ええ、当時は助産婦をしていました」

「その時の名前は？」

「内藤助産院です」

木村はそれだと思った。

「今、親御さんはおいでですか？」

「はい」

あるじが、木村と大野を奥の部屋に案内した。玄関から狭い廊下を進み、突き当たりの小さな部屋に、一人の老人が床に着いていた。「おふくろ、東京の刑事さんが何か聞きたいんだと」

母親は、背中をさすってもらいながら上半身を起こした。そして、優しい眼差しで木村と大野を見た。

「申し訳ありません。あまりお手間は取らせませんので」

木村はあるじにそう言い、母親の顔を見た。その顔は深い皺に覆われ、苦勞の跡がうかがえた。

「お母さんが助産婦をしていた時のことなんですけど……」

木村の言葉に、母親は懐かしそうに目を細めて頷いた。

「何年前までやっていたのですか？」

「二十年前です。私の妻が病気を患い、亡くなったのがちょうど二十年前なのです。その時におふくろは仕事を辞めたのですから」

横からあるじが喋り出した。

「そうですね。奥さんを亡くされたのですか」

木村が慰めの言葉を掛けた。

「二十年前に辞めた訳ですけど、その前は何年くらいやっていたのですか？」

大野が聞いた。

「二十年前くらいやっていたと思うけど……。おふくろ、そのくらいだよね」

あるじが、母親の背中をさすりながら聞いた。

「ああ、二十二年間やっていた……」

母親は目を細めて懐かしそうに言った。

「ということは四十二年前に始めたわけですね」

「そういうことになりますね」

木村が手帳を開き、何やら大野とぶつぶつ言っている。

明子が生まれたのは四十七年前、この母親が取り出したわけではない。とすると、明子の息子、一郎。一郎は今二十歳。助産婦を辞めたのが二十年前。

「辞めた二十年前のことを聞きたいのですが、門馬一昭という人の子供を取り上げた覚えはないですか？」

木村が、単刀直入に聞いた。

「ああ……。どうだったか……」

母親は、考えながら困った顔をした。

「あなたは、当時どこに居ましたか？」

木村は、困った顔をしている母親を見て、これ以上は無理と思いはるじに聞いた。

「私は妻の具合が悪く、東京の大学病院で付き添っていました」

「その時、お子さんは？」

「私は東京へ行ったきりで、娘はここでおふくろが面倒を見てくれました」

「その時、娘さんの他にだれか居ませんでしたか？」

「そう言えば……」

木村の言葉に、あるじは当時の記憶を蘇えさせた。

「確か、おふくろが取り出した赤ん坊が居たな」

「一緒にですか？」

「ええ」

「それは男の子でしたか？」

「ええ、そうです。妻が亡くなり寺泊に戻って来た時、娘の他に赤ん坊が居たのです。事情がある子なのでしばらく預かってるって言うてました」

あるじの記憶が鮮明度を増して来た。

「事情のある子？」

大野が聞いた。

「ええ。何でも女房が浮気性で、夫が生まれた子供の顔を見て、自分の子供ではないと言いだしたらしいのです。それですったもんだの揚げ句、しばらくおふくろが預かることになったのです」

母親は当時のことが懐かしいのか、うん、うんと小さく頷いた。

「その子の親の名前は覚えていませんか？ 門馬一昭の子に間違いないと思うのですが」

「いや、門馬という名前は聞いたことがないです」

「子供の名前は？」

「それは覚えていません。一郎です」

「それです。その一郎の親が門馬一昭なのです」

あるじは、しばらく考えて言った。

「そうですね。門馬と言うのですか。なんせ私が来た時はすでに家に居て、一郎としか言っただけです。覚えていたから」

母親が、息子の言葉に一筋涙を流した。

「そうだ！」

母親の涙を見て、あるじが何か思い出した。

「その浮気をしたという相手が一度来たことがあるのです」

「門馬ではなく？」

「ええ、確か……、ぬま……、そうですね。沼田って言うてました」

「えっ！」

木村は驚いて、大野の顔を見た。

「沼田って言ったのですね」

「ええ、そう覚えています」

「そのところを詳しく話して下さい」

木村は沼田の名前を聞き、先を急いだ。

「その沼田という人が来て、一郎は私の子供なので引き取りたいと言っただけです」

「自分の子供？」

「そうですね。一郎は自分の子に間違いないからと、きかないのです。」

でも、おふくろはそんなことはできないと随分突っぱねていました」「そして?」

「そして、その男はその後何回か来ましたが、おふくろのガンとした態度で諦めたのか、それ以来姿は見てないです」

「その沼田という人はいくつぐらいでした?」

「三十過ぎぐらいだったと思います」

「沼田の下の名は?」

「さあ……、分かりません。おふくろ、覚えているか?」

息子が、優しく母親に聞いた。

しかし、母親は目を細めて、首を静かに振った。

木村と大野は、門馬一昭が内藤という人に一千万円を贈ることが納得できた。一郎の面倒をみてもらい、なおかつ沼田から迷惑を被って、門馬一昭は気掛かりでしょうがなかったのだと、領けた。

沼田善二、五十二歳。上野駅で通り魔によって刺され、死亡した人物である。

木村は、沼田の写真をそつとあるじに見せた。

「この人です」

あるじは、写真を見てそう言った。

「あの頃の面影がはつきりとあります」

この言葉で、沼田を殺したのは一郎であると、木村は確信した。

木村はそのことには触れず、寺泊を後にした。

1
2

松山は、木村、大野、甘野の話を総合して、大谷一郎を重要参考人として警視庁へ任意同行した。

一郎への追求は激しさを増したが、一昭同様、口を開こうとしなかった。

一昭の先妻は、小さいころから母一人子一人で育ち親の愛という

ものに飢え、大きくなるにつれそれがどんどん膨らんで来た。特に父親に対するその気持は益々膨らみ、違った愛の表現に変わって行った。そして、常に男が居なければ不安に陥り、男をとつかえひつかえしていた時、門馬一昭と知り合い、結婚した。

結婚当初は貞淑な妻としておとなしくしていたが、いつの間にか昔の本性が芽を出してしまい、また何人かの男と付き合うようになってしまった。その男の中に沼田善二がいた。そして、妊娠した。しかし、お腹の子が一昭の子なのか沼田の子なのか分からないまま、内藤助産院で一郎を生んでしまった。そして、その後のドタバタ劇、松山は、事の真相を、そう解釈した。

「一郎は沼田の子だったのですかね？」

大野が口を開いた。

「そうかも知れん。そして、ある時一郎は沼田が父親であることを知り、今までの恨みを刺し殺すということまでうさを晴らしたのかも知れんな」

松山は、黒板に書いてある複雑な相関図を前に、一連のつじつまを合わせた。

「そして、そのことを知った門馬一昭は、不憫な一郎のためにお金を残し、自分も同じように人を刺して殺した」

木村が言った。

「家売った金と明子の保険金」

大野がぶつぶつと言った。

「明子を交通事故で亡くしたわけだけど、もしかしたら一昭が殺したとも考えられるな」

「そうです、そうですよ。そして、多額な金を一郎とその回りの人のために作った」

そこへ、一郎の交友関係を調べていた石橋刑事から連絡が入った。「一郎の遊び仲間に内藤道子というのがいます。道子は、寺泊の内藤さんの娘です」

「何!」

石橋の言葉に、捜査本部が色めき立った。

「内藤道子は現在二十三歳。一郎とは恋人同士ではないが、親しい間柄ということですよ。そして、一郎は最近になって何か悩んでいたらしいと、一郎の友人が話していました」

「そうか。それは沼田のことだろう」

一郎は、幼いころ一緒に遊んでくれた道子と偶然東京で知り合った。そして親しい間柄になり、交友を深めたに違いない。

「道子は最近男に振られ、やけになっていたということですよ」

「付き合っている男がいたのか？」

「そのようです。その辺をもう少し詳しく調べていますが、あくまでも一郎と道子は恋人同士ではないようです」

「分かった」

一郎と道子は幼なじみであって、恋人同士ではないらしい。

松山は、その道子を振った男に何か疑問を感じた。

13

門馬一昭、大谷一郎、共に口の堅い人物である。

一郎は、過去のしがらみから沼田を刺したことは明らかであり、少ない目撃情報からも一郎らしい人物が上がって来ており、犯人である確立は高くなって来ている。

「警部、大変なことが分かりました」

内藤道子を調べている、大野刑事から連絡があつた。

「道子の恋人というのは、門馬一昭に殺された渡辺勇雄です」

「なんだと！」

松山が椅子から立ち上がった。

「道子は、妻子ある渡辺勇雄と二年前から付き合い合っていました。道子は上野でアパートを借り一人住まいをしています。どこでどう渡辺と知り合ったのか分かりませんが、近所の話では度々来ていて何度か泊まっていることも確認されています。そして、男同士のどな

り合う声も何度が聞いているとのことですよ」

「一郎か？」

「いや、年配の声だと隣の人が言っていました」

「年配？」

松山には、それがだれだかピンと来た。

「道子は？」

「勤めが浅草だそうです。これから向かいます」

松山は、もしかしたらと、黒板を睨んだ。

一郎が沼田を殺つたのは間違いないだろう。そして、一昭が殺つた渡辺勇雄は、通り魔的犯行ではなく、一昭が目標を定めて殺つたに違いない。自分の息子である一郎が付き合っている道子を、おもちやのように遊んでいる渡辺を知って、一昭は道子の家に出掛けた。一郎の親としてなのか、昔世話になった内藤の娘ということか。何だったのかは定かではないが、一郎のため、道子のために正義を奮ったに違いない。

松山は、一連の出来事に背筋が寒くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473j/>

沈黙の荒野

2010年12月10日19時41分発行